

# 名作はしばらくして再読してみよう

text : 宝彩有菜

中学校に進学した時に、現代国語の先生で教育熱心な方がいらっしゃいました。中学生の3年間で読むべき本として「100冊の課題図書一覧表」をすぐに与えられました。3年間ですから、1年に33冊、1ヶ月に約3冊のペースで読まなければ読みこなせません。100冊の中には中島敦の『李陵』のような短編から、トルストイの『戦争と平和』のような長編まで色々ありました。課題であった長編のいくつかは、途中で挫折したままで未だに読み終えていません。ですから、100冊の課題は消化できませんでしたが、しかし、この課題図書は、読書の良い動機付けになったと思います。

確か、課題図書で最初に手にして読んだ本は、図書館で借りてきた夏目漱石の『坊ちゃん』だったと思います。小説の内容もさることながら、一冊の小説を読み終えたという充実感で、中学生になったのだなあと改めて誇らしく感じたことを覚えています。

この『坊ちゃん』という本は、夏目漱石の初期の作品で、最近Kindleでダウンロードして無料で読めるようになっていましたので、携帯端末にダウンロードして、再び電子書籍で読んでみました。

50年振りくらいに読んだわけです。当時はとても長いように思いましたが、読むのが早くなっているせいか、すぐに読み切りました。そして、中学生の時に読んだ印象とはずいぶん変わった印象を受けました。中学生の時には、分からなかったようなこともあるからだと思いますし、自分自身が成長し、内容を客観的に多面的に見れるようになっていく部分もあるからだと思います。また、明治の文化の薫りのする作品ですから、思想や時代の変化の要因もあるでしょう。

本自体は、何年たっても一言一句も変わっていませんが、時代や自分自身が変わると、見えてくる情景や、入ってくる内容や、言わんとしているポイント等の受け取り方が変わってくるのでしょう。

つまり、同じ本をしばらく時間を空けてから読み直してみると、今まで見えなかった所等が何かしら見えてきますが、それは逆に言えば自分の成長など、読み手の変化を見るということになるわけです。成長の度合いが大きければ、それだけ同じ本でも違った本のように思える度合いが大きくなるのでしょう。ですから、中には、子供の時は面白いと思っていた、たとえ名作だと言われる本も、大人になるとそれほど面白くなくなっていることもあります。

私は、この「宝彩BBマガジン」に「イエスと弟子トマス」という題名で「トマスの福音書」の解説を連載しています。同じ福音書を何回も「これはどういう意味だろうか」と考えながら読んでいますから、読み込めば読み込むほど面白く思えて、回を追うごとにより深く解明されてきている気がします。

数年前に最初に読んだ時は、殆ど分からなかったような項文も、細部がわかるようになってきた感じです。

これは、同じものを何度も読むと、多角的に検討する時間やチャンスが増えるので、より正解を発見しやすくなるというのがあるかもしれません。自分の読み方が成長しているわけで、中学生から成人に成長すると読み方が変わるように、同じ仕組みでしょう、受け手の変化が要因です。

本を読むことによって人生経験を増やしたり、考え方、見方を柔軟化させることもできますが、本を読むことによって自分の人生経験が増えたことをチェックしたり、考え方、見方が柔軟化、深化、変化したことをチェックすることもできるということです。

本を読んで修行を進めることもできます。また、再読することによって自分の修行が進んだことを確認もできるということです。

良い本は、我々にとって、いつもとても良い友達だと言えると思います。



Illustration by やま